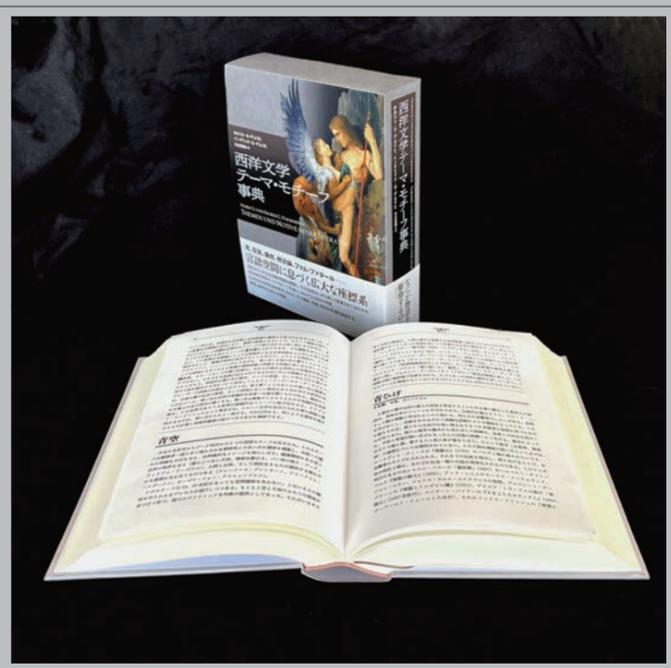


本書の特徴

- 既存のシンボル事典や文学事典とは異なる切り口で、西洋文学におけるテーマおよびモチーフを厳選・網羅。テーマ・モチーフの概念的説明にとどまらず、それらが西洋文学においていかなる役割を果たし、歴史的にいかに変遷してきたかを比較文学の観点から詳説する、全く新しい文学事典。
- それぞれのテーマ・モチーフの説明において、英語・ドイツ語・フランス語・イタリア語・スペイン語あるいはラテン語の文学を中心に、ロシアや北欧、ラテンアメリカ、古代ギリシャ・ローマなどの地域も含む、1800名の作家、3500作の文学作品に言及。関連する文学作品に触れるのみならず、筋書きやその解釈に踏み込みながらテーマ・モチーフについて詳解。
- 執筆者は、比較文学研究者であるホルスト・S・デムリヒ（ペンシルバニア大学）およびイングリッド・G・デムリヒ（ドレクセル大学）。世界各国で翻訳され、大学の授業において広く利用されている。

本書の利用方法

- 文学のみならず映画や漫画など、表象文化全般の理解・分析のために必携。各記事に対して付された参考文献をもとに、さらに世界的に詳細な研究状況を知ることができる。
- ある文学テーマ・モチーフに関連する新旧の作品に手を伸ばすための詳細なブックガイドとしても非常に有用。
- 小説・脚本などの創作者が、あるテーマ・モチーフに関する作品を制作するにあたって、関連する先行作品を参照・調査するための唯一の事典。



『西洋文学テーマ・モチーフ事典』

A5判・上製函入・総680頁

定価：本体12,000円+税

ISBN978-4-336-07476-8

2024年6月刊行

国書刊行会

〒174-0056 東京都板橋区志村 1-13-15

Tel.03-5971-7421 Fax.03-5970-7427

<https://www.kokusho.co.jp>

e-mail:info@kokusho.co.jp

帳合・書店印

注文書

この注文書で最寄りの書店へお申し込みください。

国書刊行会

西洋文学テーマ・モチーフ事典

ホルスト・S・デムリヒ&イングリッド・G・デムリヒ 著／川東雅樹 訳

冊

を申し込みます。

お名前

ご住所

電話
FAX

西洋文学テーマ・モチーフ事典

ホルスト・S・デムリヒ／イングリッド・G・デムリヒ 著 ※川東雅樹（秋田大学元教授） 訳

1800名の作家、
3500作の文学作品を例示し、
1600余のテーマ・モチーフを詳説。

光、狂気、偶然、黙示録、ファム・ファタール――

古来よりいかなる主題が物語を駆動し、

その伝統はいかに新しく変奏されてきたのか。

西洋文学に現れる文学テーマ・モチーフの機能、特徴、歴史の変遷を
詳説する、文学研究と創作のための必携大事典。

国書刊行会

◆収録項目

青い花／青空／青ひげ／赤い宝石／悪／アーサー王／仇討ち（血縁者による）／悪漢／アブラハム／アペラールとエロイーズ／アルケステイス／アルゴ船の英雄たち／アンティゴネー／アンニユイ／アンフィトリオン／家／イフィゲイニエ／隠者／海／憂い／英雄／エレクトラ／エロス／円環、円運動／エンブレム／老い／オイディプス／オデュッセウス（ウリクセス、ユリシース）／折り合い／オルペウス／改革（個人と社会）／怪物／カエサル／鏡／賭け／影／家族／カーニヴァル／鐘／狩り／姦通／帰郷／騎士道冒険／境界／狂気／兄弟の争い／霧／キリスト／キルケー／近親相姦／金銭（黄金）／金羊毛／空間／偶然／雲／芸術家／幻覚／権力／高貴な野生人／高級遊女（宮廷遊女）／攻撃／心（心臓）／子殺し／乞食／物乞い／孤独／子どもの予期せぬ病気や死／サタン（ルシファー、メフィストフェレス）／さまよえるオランダ人／死／色彩／自己実現／自殺／実業家／自動人形（マリオネット）／島／ジャンヌ・ダルク／絨毯／女性（母／娘、偶像／妖婦）／城／深淵／人物像／成熟／井泉／聖杯／制約／自由／世代間の争い／疎外／戦争／太陽／対話／沈黙／ダヴィデ／他者／黄昏／旅路（旅人生行路）／たぶらかし／食べる（カニバリズム）／探索／ダンディー／断念／父／息子／月／手／庭園／デカダンス／道化／動物界／都市／トマス・ペケット／トリスタンとイゾルデ／ドン・キホーテ／ドン・ファン／ナポレオン／ナルシシズム／廃墟／犯罪（物語としての）／火／光／ピグマリオン／病気／ファウスト／ファミリアタール／不安／風景／フォルトゥーナ（運命の女神）／復讐／不条理／船／難破・港／プロメテウス／分身（自我の分裂）／ヘラクレス／変装／遍歴者（遍歴）／冒険／豊穣／不毛／放蕩息子／星／ホロコースト／魔術師マリーリン／窓／真昼／道／無／目／迷宮／名誉／メーディア／メタモルフォーゼ／盲目／黙示録／山／友情／タベ／ユダヤ人／ユートピア／夢／夜明け／ヨブ／ヨナ／夜（闇）／楽園／螺旋／両性具有／錬金術／錬金術師／労働／労働者／ロビンソン（無人島生活）

◆「青い花」「青空」「海」「霧」といった象徴的な自然物から、「愛」「悪」といった抽象観念、「仇討ち」「賭け」といった物語内の行為、「芸術家」「実業家」「父―息子」といった職業・役割や人間関係、「アンティゴネー」「オイディプス」「ジャンヌ・ダルク」のような神話上・歴史上の人物まで、多岐にわたるテーマ・モチーフを見出し語として採用し、多岐にわたる作品を紹介してそれらを解説。

序文より(抜粋)

テーマとモチーフは文学作品の基礎である。その位置や配置、相関関係、反復と変奏が広大な座標系を作りあげる。「……」国も違えば、活動した時代も大きく異なる作家たちが、テーマとなった典型的な人物やその人物たちの成長段階、かれらの人生の節目に割りあてられた出来事、そしてモチーフやモチーフセットをとりあげ、掘り下げ、新たに組み上げてきた。「……」その過程で、作家は意識的にも無意識的にも、社会習慣となった伝達方法や思考様式を受けつぎ、文学の伝統との対話を構築する。

◆著者略歴

ホルスト・S・デムリヒ 1930年〜2021年。ドイツ生まれ。ドイツ文学・比較文学研究者。シカゴ大学でドイツ文学の博士号を得て、ウェイン州立大学、ペンシルバニア大学で比較文学・ドイツ文学を講じた。妻のイングリッドと共に主題研究で多くの論文・著書を執筆し、なかでも『西洋文学テーマモチーフ事典』は世界中で読まれている。イングリッド・G・デムリヒ 1936年〜2018年。米国生まれ。テーマ研究・比較文学研究者。ウェイン州立大学でフランス文学の博士号を取得し、ドレクセル大学で教鞭をとった。夫のホルストと同様、主題研究で多くの論文ならびに著書を共同執筆した。

人名索引 595

アゴスティニ、ルドヴィコ Agostini, Ludovico 117	アジュンダ、イザベル Allende, Isabel 61
アシモフ、アイザック Asimov, Isaac 116, 117, 411	アスピリン、ロバート Aspirin, Robert 413
アダムス、アルチュール Adams, Arthur 116, 117, 119	アッカー、キャシー Acker, Kathy 144, 145
アッカーマン、ハンス Ackermann, Hans 417	アッシュ、シヨールム Ash, Sholem 147
アッパナス Appian 108	アップディク、ジョン Updike, John 113, 114
アッポグイタ、ジョフ Appogiuta, Joef 113, 114	アディソン、ジョージ Addison, Joseph 113, 114, 115, 116
アトキンソン、ブライアン Atkinson, Brian 413	アドラー、ザムエル Adler, Samuel 419

怪物 107

次々と課される試練と人間存在の真の秘密を解いたのは、長い苦難の道りが終わることになったことだった。ジークフリートや聖ゲオルグゥスのような中世叙事詩や中世後期の散文物語の英雄たちが、竜やその他の怪物たちと戦わねばならないのは、それが宝物を守っているだけではなく、人間の内的衝動の秘密の鍵を握っているからだ。このアイデアの魅力は今日まで失われることはない。これをアーシュラ・K・ル・グウィンが『ゲド戦記』(1979) 三部作の中心にすえ、怪物との戦いを繰り返すことで、魔法使いゲドが生や悪、無意識そして死の誘惑と対決する様子を描いている。

❶悪との結びつきについていえば、西洋文学で人気のある怪物は竜である。ゲルマン伝来の竜の形象には陰湿な水の妖精やヒドラ、そして空飛ぶ怪物の特徴を彷彿とさせるものがある。生命の泉(井泉)の入口を見張り、莫大な地中の宝物の上に居すわり、火を支配する。中国やバビロニア、ギリシャの神話に登場する竜は、根源となるカオスと密接な関係をもっている。竜に打ち勝つことで社会の進歩の条件が整い、華ある文明が導かれる。キリスト教文学ではサタンが竜の相貌を帯びる一方で、竜の描写に悪魔的なものの特性が紛れこんでいる。竜の中には危険な尻尾以外に裂けた前足や赤い翼、角をもつものもいる。そのため竜との戦いはあらゆる悪の現象とくりかえし対決するという形をとる。「ペーオウルフ」(650-750頃)のように英雄が戦器で命を失う場合でも、彼の行為は最後には善が勝つという信頼感を再生するのである。ダンテは『地獄篇』(1308)でさまざまな怪物それぞれに居場所を分け与えた。中世叙事詩の散文テクストは竜をとりわけ宝物の番人というイメージと結びつける。19世紀になると資本主義の誤った方向への進展のシンボルになる。そして20世紀の文学は最終的には悪の連想から竜を切り離すことになる。たとえばアン・マキャリーの『人間の竜騎士』(1968-78) シリーズでは竜は人間の忠実なお供となっており、別の太陽系で人類の進歩を約束するのである。

❷近代文学では怪物のモチーフは先祖返りの性や自我の混乱、そして陰湿で衝動的な性癖を強調する。比喻は直接的に語られることもあれば、イメージ連想で組み立てられることもある。ジャン・ラシーヌの『フェードル』(1677)のフェードルは自分自身を、文明生活を飽く危険な怪物になぞらえる。彼女の自説は混沌を洗い流して、世界を救いだすことになるのだ。それに対して、ポール・クロードルの『黄金の頭』(1889)のシモン・アニェルが幻夢のなかで変身した怪物は、手のつけられない権力衝動にびったりの動物の姿をしていた。吸血鬼(吸血撃、食べる、ファム・ファタール)を暗示するものは、異常をきたした人間関係を強調するのみならず、社会の破壊傾向全般をも象徴する(シェリダン・

●【ページ見本】 45% 縮小

人名索引 595

アゴスティニ、ルドヴィコ Agostini, Ludovico 117	アジュンダ、イザベル Allende, Isabel 61
アシモフ、アイザック Asimov, Isaac 116, 117, 411	アスピリン、ロバート Aspirin, Robert 413
アダムス、アルチュール Adams, Arthur 116, 117, 119	アッカー、キャシー Acker, Kathy 144, 145
アッカーマン、ハンス Ackermann, Hans 417	アッシュ、シヨールム Ash, Sholem 147
アッパナス Appian 108	アップディク、ジョン Updike, John 113, 114
アッポグイタ、ジョフ Appogiuta, Joef 113, 114	アディソン、ジョージ Addison, Joseph 113, 114, 115, 116
アトキンソン、ブライアン Atkinson, Brian 413	アドラー、ザムエル Adler, Samuel 419

怪物 106

怪物仲間を構成する架空の動物の文学イメージはおそらく無意識の不安観念から生まれたものだろう。怪物はしばしば英雄の人生や冒険、悪そして死などのテーマの形象との関連で登場する。怪物の見張る入口は死の領域、そして生の起源にも通じている。かれらが伝えるのは自然の諸力のもつはかりがなく、混沌としたものの気配である。外見を決めるのは通常、次のふたつの特徴である。(1) 法外な大きさ、恐ろしい姿、荒々しいふるまい、そして人目を惹く特異な風貌(旧約聖書のリヴァイアサン、ギリシャ神話の巨人族、キュクロプスや竜、ゴリアテあるいはヴィクトル・ユゴ『ノートルダム・ド・パリ』1831のカジモドのようなタイプ)。(2) 合成動物(たとえばライオンの胴体、鷲の翼、尻、嘴をもち、ときにはライオンの前足あるいは翼も一緒に描かれるグライフ、ライオンの頭とヤギの胴体、そして竜の尻尾を合わせたキマイラ、スフィンクスのように半人半獣のおぞましい存在)。怪物の外見と特性は自然の理に反している。雷のように白い雄牛のミノタウロスが肉を喰らい、ディオメデスの雌馬は人を喰い、竜は火を噴く。その行動はしかしながらかれらを構成する原理に一致しているので、心理学的にはありうるとい印象を与える。恐怖小説やノン・ドゥールの物語、最近のファンタジー物語でこの存在の本質が疑似心理学的視点から解釈される場合にはなおさらそうである。怪物は人間に敵対し、放浪者や孤独な船乗りを脅かし、子供や若者、少女に犠牲を求め、国を荒らし、これをなだめるのに賢い物をさしださねばならない存在である(ハルビュリア、ミノタウロス、ラミア、シレーネ、スキュラ、ケルベロス、スフィンクス、メネクス、レルネのヒドラ、ネメアーの獅子、そして中世の物語のこびとたち、SF小説の肉食の怪物すべて)。

怪物との戦いは生命を賭けることが求められる。したがってこの戦いは、英雄や、英雄概念にそって構想された登場人物すべてにとつて最も困難な試練に数えられる。この対決は広い意味で自己認識の特別な形式とも見なされる。英雄は試練を経て、自己認識の新たな段階に達する。たとえばペルセウスはメドゥーザを退治したのち、アポロンの神殿に入ることができたが、神殿の入口に書かれてあったモットーは「改自身を知れ」だった。テーマウスは迷宮に突き進み、ミノタウロスを殺し、自分の人生の使命をあらためて理解する。ヘラクレスはたくさん怪物から世界を浄化し、人生の最後には神の座に列せられる。オイディプスは謎かけを解いて、スフィンクスを打ち破る。もともと、彼が現実で

●巻末には網羅的な人名索引・作品名索引、項目ごとの充実した参考文献一覧を収録。